

あたららしい街と、わたしたちの未来



東北大学大学院教授
五十嵐太郎

マウントフジアーキテクトスタジオ
原田真宏

藤村龍至建築設計事務所
藤村龍至

間宮晨一千デザインスタジオ
間宮晨一

第1回学生実施コンペ

未来の風景をつくる



「大学でしか学べない事を 考えたり、異なる可能性を 試すことも大切。」

1. 学生実施コンペ開催の背景

間宮 まず簡単に、僕が2012年から取り組んだ「土原住宅プロジェクト」の話をさせてください。これは、名城大学の谷田研究室と、僕のデザインスタジオとの産学連携プロジェクトで、学生が主体となって1軒の住宅を設計しました。実際にクライアントに会って打ち合わせをし、基本設計・実施設計だけでなく、DMやWebサイトの制作も学生が手掛けています。彼らが構造家や造成家、左官などの職人たちにインタビューを行い、現在1冊のBOOKにまとめているところです。

五十嵐 住宅自体は今、どういう状況なんですか？

間宮 4月末にオープンハウスを控えていて、もう完成間際ですね。このプロジェクトで幸運だったのは、学生が設計することに対して、「いいですね！楽しそう」と共感してくれたクライアントさんに出会えたことなんです。もちろん僕が最終的な責任をとることが前提でしたけど、それでも学生や研究室が相手では不安だったと思うんです。その方のおかげで、なんとかこのプロジェクトは成功したと思っています。

原田 間宮さんは、自分のプロジェクトを学生に渡してあげたんですね、すごいな（笑）。

間宮 そうなんです（笑）。以前、「ナゴヤデザインウィーク」というイベントがあり、僕は2009年に実行委員を担当したんです。その頃から名古屋や中部圏を若い力で盛り上げてい

きたいという願いがあって。何とか学術都市としてのにぎわいを創出できないかと、この計画に乗り出しました。審査員の先生方に声をおかけした背景として、五十嵐先生は今年の「あいちトリエンナーレ」の芸術監督を務めていらっしゃいますし、実は僕、芝浦工業大学時代に非常勤で教えていただいたことがあるんです。そして原田さんは、僕の大学時代の尊敬する先輩でいらっしゃいます。藤村さんとは、昨年の建築卒業設計展ディプロマで初めてお話させていただいたんですが、以前から藤村さんの『アーキテクト2.0』がすごく面白いと思っていました。名古屋の街を変えていくために、みなさんの力を借りて一石を投じることで、より大きな波紋を生み出せないかと期待しています。

原田 なるほど。そのプロローグとなる「土原住宅プロジェクト」を経験してみて、いかがでしたか？

間宮 正直、想定していた以上に大変でした。学生や研究室との関わり方が難しいなと思いましたね。谷田研究室の学生全員が、どのように関わったらいいのか。結局、主体的に動いた学生が頑張ってくれて、僕のスタジオにずっと入り浸っていたので、クライアントさんにも「間宮さんのところのスタッフかと思っていました」って言われたくらい。そのときの経験をふまえて、今回はあくまでも大学の研究室をお願いすることを条件に考えています。研究室の先生に先頭に立っていただいて、組織づくりをしてもらえることが参加条件です。

2. 大学における建築教育の問題点

間宮 先生方が、今の大学の建築教育について思うことはありますか？ 学生に感じていることでも結構なんですけど。

五十嵐 「あいちトリエンナーレ」で関わっているアート絡みの話なんですけど、以前、建築系ラジオで話題になった『こたつ問題』を知っていますか？ 2009年の越後妻有アートトリエンナーレの公募枠で、「みんなのこたつ」という作品が勝ち残って、現地に展示されました。設計したのは東京大学の大学院生2名で、彼らはアイデアコンペキラーだったんですよ。プレゼンテーションがすごく上手で、あちこちで賞を取っていて。でも一方で、実物の完成度があまりにかけ離れていたんで、そのギャップが物議を醸していたんです。確かに建築という職能は、設計者と施工者が分かれていますけど、建築学生がアートのインスタレーションをやると、自主施工になってしまうんですね。そもそも建築教育では、ひたすらアイデアとかプレゼンテーションの訓練をするし、そのこと自体にももちろん意味があるんだけど。それに対し、アート系の学生は、自分が想像できる範囲で手を動かしてモノを作るので、プレゼンテーションは少々下手かもしれないけれど、作るものに対しては身体の延長として確実に完成させていました。

原田 建築学科の学生って、言ってみれば大学生活の4年間、スケールレスな世界に生きているわけですよ。初めてスケールを持つ存在と出会ったとき、相当愕然とすると思うんです。僕が芝浦工業大学で教えるようになってから、うちの学生たちはわりとコンペに強くなったんですよ。僕の教え方が良いという話ではなくて。何が上達したかということ、建築の設計というよりも「コンペ案」を作るスキルなんです。自分の設計している対象が、スケールレスな「新しい計画論的な手法」みたいなもので、そこを抑えておけばコンペで入賞できるんだってよく分かっているんですよ。ある意味、釣り師みたいな気分といいますか（笑）。コンペ環境に過度に適応している学生が増えてきている、という印象はありますよね。

間宮 カリキュラムについてはどうなんでしょうか？ 現在のフランスでは、最低でも1年以上は実施を学ぶためのインターン制があると聞いているんですが。

五十嵐 フランスは日本ほど建築が大衆的ではないんじゃないかな。日本は良くも悪くも大量に建築学生がいて、そこからふるいにかけていきますよね。母集団が多いってこと

は、確率的にも優れた人が出てくるチャンスにつながります。日本は「建築家にならないけど、建築に所属する人がいっぱいいる」という文化なので、どうしてもフランスとは教育の差が出てきますね。

原田 建築学生、本当に多いですよ。僕の大学では、ひと学年110人、120人の学生が在籍しています。そこで実施作品に挑戦できるかと言えばなかなか難しい。芸大みたいに少人数だったら、教育機関の中で案づくりから実作、そしてフィードバックという流れが可能だと思うんですけど、他の多くの大学の場合は、フィードバックができないままに卒業していくという現実はあるでしょうね。もしかしたら大学が4年じゃなくて5年あったら、そういう機会が持てるのかもしれないけれど。藤村さんの大学はひと学年何人くらいですか？

藤村 うちの通常は160人程度ですが、多い時で190人くらいです。

五十嵐 入学するその日まで、確実な人数ってわからないからね。

藤村 その人数を10人くらいの先生で割って教えるんですけど、最初はびっくりしましたね。でも最近ではそれを生かして、4年生などでは大量設計をテーマに課題設定をしているんです。全員で案出しをして、それを住民の人たちに投票してもらい、淘汰していくというフィードバックプロセスを取り入れています。モノのフィードバックは物理的になかなか難しいですけど、社会的なオピニオンのフィードバックなら授業内でも可能ですから。

五十嵐 この15年くらいで、大学の教育環境、とくにデザイン環境は急速に変わってきていて、活躍している若手の建築家が研究室をもって、学生に教えていることは当たり前になりましたよね。20年前は、在野で設計している人と、大学のアカデミズムで教えている人は別世界というイメージでしたから。

間宮 純粋にうらやましいです。僕の大学時代は実施の経験豊富な先生が少なかったこともあり、言っていることに信憑性が持ちにくかったです（笑）。

藤村 確かにそうでした。でも、実務メインの人が大学に戻って教える際に、建築論がないまま教育に取り組んでいるケースも多いのではないかと、という自己批判があるんです。きちんとした建築論があって実施を教えるなら良いですが、それがないと、単に学生を労働力やイベント要員として繰り返



「学生の作品でも十分に社会的なインパクトが出せる。」

出すだけになってしまうのではないかと。

五十嵐 社会に出たら嫌でも実務設計に直面するわけだから、逆に言えば、大学でしか学べないことを考えたり、異なる可能性を試すことも大切ですからね。大学が即戦力だけを身につけさせる専門学校化すると、今の効率的な社会が求める予備軍の単なる養成所になってしまう。その辺の舵取りが難しい。

藤村 何らかの形で研究的側面を維持することが、大学の役割だと思いますね。

原田 僕は、1年に1つは実作をやることにしています。その際、学生の方を向いて「こうやったらいいよ」とは言わないようにして。僕が方法論を示してしまうと、今の学生たちはすごく素直で器用だから、ちゃんと自分のものにして、そこそこの設計をします。でもそれは、計画論の延長線上でしかないんですよね。建築の本質を計画論的なところに設定してしまうことの弊害って、既に発展途上国でもなく全国に建築家が無数にいる現在、実は相当にあるような気がしているんです。

藤村 ちなみに、どんな実施プロジェクトをやっているんですか？

原田 セルフビルド的なものや、広島某地域の街づくり計画といった地域振興計画にも取り組んでいます。いま面白いのが、三鷹に「ハモニカ横丁」のアネックスを作ろうという

プロジェクトがあって。無計画な集落のようなものを計画的に作ろうという、非常に難しい設計なんですけどね（笑）。産と官をあまり分け隔てなくやっています。

藤村 僕は行政の公共的なプロジェクトのなかに大学の役割を見出したいので、あまりコミュニティ寄りにならないようにしているんです。今回の学生実施コンペにも通じるものがあるんですが、半分は実験的な部分を維持しつつ、よりリアルなニーズに対してモノを作っていく試みを続けていきたいと思っています。

原田 芝浦工大の場合は、江東区の中でも数少ない建築学科のある大学ということもあって、区役所や町の人からは、ディベロッパーとは違った視点での地域デザインの提案者としての役割を期待されているんです。僕らには利益が発生しないから住民に安心感を持ってもらえるし、耳触りの良い「いい話」に聞こえます。でもやっぱり、「ごっこで終わる」という感じもすごくして。教育としては意味があるけど、街にとってのメリットは本当にあるのかなと感じる場面が多々あります。課題を設定して、いろいろな作品ができて、小さい展示会をやったりして、区や住民も最初のうちは「すごいことが起こるんじゃないか」って期待を持ってくれます。でも、学生あるいは教員が教育的に考える建築の出口と、住民が求めている街に対するエフェクトは全然合っていない。結局、何年か後には尻すぼみになってしまうんですよね。

「名古屋や中部圏を若い力で盛り上げていきたい。」



藤村 僕も全く同様の経験があります。今の東洋大に着任したのが2010年で、通勤中にTwitterで「鶴ヶ島なう」ってつぶやいていたら、鶴ヶ島市長と知り合ったんです。それで市長にお会いして、4年生向けの課題を出していただいたんですね。市長が問題だと思うことを10個くらい挙げていただいて、学生たちに課題を出したら、学生は学生でいろいろ考えるわけですが、決してリアルなものではないんですね。すると結局、「学生さんは元気があっていいですね」で終わってしまう。設計の初期から住民のみなさんに入ってもらって、何度か一緒にセッションしないとダメだと痛感しました。だから2年目は住民投票を5回繰り返すことにし、ボリュームの段階からセッションを重ねていったんです。そうすることでニーズが合致して、コミュニティの人たちの意見もまとまり、まさに大学が行政と住民の間に入って、第三者としての立場で振る舞うことができました。

間宮 現在はどんな活動をしているんですか？

藤村 鶴ヶ島市内にあった工場が移転した跡地に、メガソーラー発電施設を建設する事業が発表されたんです。住民の不安を解消するために、敷地の一角に環境教育施設を造るプロジェクトが立ち上がっています。まだ4月に始まったばかりで、竣工は12月の予定なんですけど、大学院の学生たちが住民投票やセッションを繰り返して実施設計をする課題を設定しました。それがうまくいけば、ワークショップや投票をや

りながら、オープンプロセスで公共施設を作るための社会実験になるんじゃないかという期待を込めています。大型の学校施設なども、1年2年の話ではなく、5年10年のスパンなら実現できる。そういうロールモデルを作る実験の場として、大学という教育機関は最適だと思うんですよね。

原田 藤村さんはうまくやっているなぁと感心しますよ。大学の中で言う「社会」って、抽象的な概念になってしまいがちなんですよね。象牙の塔の中でしか通用しない「社会」で、抽象的なゲームを続けているイメージ。でも、大学の授業で街の人たちと何回も会っていく中で、学生にとっての社会が色を取り戻すというか、その再定義ができるような気がしますよね。一般的な学生の社会的なプロジェクトって、実際に街を作るわけでもないし、アウトプットとしては市長に見せるとか、市役所に展示するくらいです。やはりそれではお互いに本気度が高まらないと思います。今回のように失敗したら血を流す人がいないと、お互い本気のやりとりはできないとか。だから間宮さんは、血を流す覚悟をしたということだと思って、期待していますよ（笑）。

五十嵐 学生が設計した家が本当に建つって、大変なことだからね。

藤村 でも、丹下健三の頃は大学の研究室で国家プロジェクトを設計していたわけですし、篠原一男の作品も全部研究室で設計されたわけです。大学と社会の関係が遠くなってしまっ



「名古屋の学生たちも自分たちなりのテーマ設定を見つめる機会にしてほしい。」

たのは、この30年の出来事だと思います。ただ最近、大学で行政のプロジェクトをやっていると思うのは、本当に行政のツボを突くような課題ならば、学生の作品でも十分に社会的なインパクトが出せるということです。その場合、インフラの老朽化や中心市街地など、政治的に論争を巻き起こすようなポイントを突くように課題を設定する必要があります。「鶴ヶ島プロジェクト」も、最初は地方版で扱ってもらうのがやっとでしたが、何とか頑張って渋谷のヒカリエで展覧会を開催したんです。そこでようやく本社の記者に届くようになり、NHKや朝日新聞、テレビ朝日にも取り上げられました。全国版の朝刊社会面に、次の衆議院選挙の論点のひとつとして、東洋大学のプロジェクトを取り上げていただいて、「市民と大学が協働してインフラ老朽化に取り組んだ。次の政権はこの問題をどのように解くのか?」と書いてくれたわけです。そうすると市も本気になりますよね、そもそも先進的な問題ですから。こういった仕掛けをしないと、本当に色物になってしまうんじゃないでしょうか。

原田 ええ、ほのぼの記事で終わってしまいますよね。

間宮 確かにそうですね。僕にとってもこのプロジェクトは勝負なんです。学生たちが活躍する場をつくり、このプロジェクトに共感を持ってくれるクライアントさんを発掘することで、名古屋の街や中部圏を少しでも変えることができるのか。

藤村 クライアントになる方たちは、どんなストーリーなら共感できるんでしょう？ 研究室のモノづくりや、学生がオープンな議論をしながら作っていることに対して、魅力を感じる人、共感してくれる方は必ずいますよね。

間宮 はい。土原住宅プロジェクトのクライアントさんも、未経験だからこそその自由な発想や、面白いアイデアに期待して承諾してくださったんです。今回も学生ならではの魅力や可能性を、クライアントさんにアピールしていきたいです。

3. 学術都市を担う学生に期待すること

間宮 ところで、今年の「あいちトリエンナーレ」には、藤村さんも関わられるんですよね？

五十嵐 ええ。現代美術のジャンルで、街中にあるビルで展開していただきます。最初から作品が完成しているのではなく、建築学生を巻き込んで、期間中に少しずつ形を変えていくワークショップ型なんだよね？

藤村 そうです。大学でやっていることを名古屋でやったらどうかと思っています。どういった人を受け皿にするかは検討中なんですけど、グランドビジョンとしては、名古屋の将来像をテーマにしたセッション型の空間を作るイメージです。

間宮 前回のトリエンナーレはアート系が中心だったのに対

し、今回は五十嵐先生が早い段階から建築やデザイン系の人を組み入れてくださったそうですね。名古屋の可能性を考えると、アートとデザインの両方を発表すべきだと思っていたので、とても楽しみです。今も名古屋はユネスコ認定のもと、デザイン都市を宣言していますが、もともとアートやデザインの土壌はあると思うんですよね。80年代は今よりも現代アートが盛んで、それこそ奈良美智さんとか村上隆さんが作品を発表されていたくらいですし。

五十嵐 そうだね。名古屋は美大や芸大が互いに張り合うくらい数があるし、建築系の大学も10校以上はあるから、教育と人材のポテンシャルは相当ありますよね。間宮さんが言ったように名古屋市はデザイン都市宣言をしているし、国際デザインセンターだってある。ただ、建築デザインにおいては、名古屋はアトリエ系建築事務所が少ないので、卒業後の定着率が高くないんです。学校はこんなにあるのに、東京や関西の建築事務所に学生が流れていては、もったいない気がしますよね。京都なんかだと、アーティストの定着率は高めなんです。名古屋は教育機関の環境はそれなりに整っているけど、そのひとつ先のところに課題があるなと思います。

原田 名古屋ではかなり裕福な人でも、家を建てるときは建築家に頼むより住宅メーカーのフルスペックを選ぶと聞いたことがあります。実際に名古屋の住宅街を見ても、住宅メーカーの家が多いんですよね。そういう土壌があるから、なかなかアトリエ事務所が成立しづらいんでしょう。だから、建築家にダイレクトに頼んで建てる家と、完成型が分かっている住宅メーカーの家が両極だとしたら、その中間くらいの家が打開案になるかもしれないですね。建築デザイナーに頼むことの間口を広げることができたら、もっと仕事が増えて、学生を受け入れてくれるアトリエ系事務所も増えていくんじゃないかな。そういう意味でも、価値のあるプロジェクトになるといいですね。

五十嵐 ところで、名古屋の人って「名古屋には何も無い」って謙遜しない？

間宮 そう言いますと？

五十嵐 さっきの話みたいに大学は充実しているし、大型の県美術館も市の美術館も両方あって、仙台や金沢などの地方都市に比べたら、圧倒的に環境は恵まれていると思うんです。でも、名古屋の人は「名古屋には何も無い」って言うんですよ。

原田 ああ、確かにそうですね。名古屋の大学に行って講

評会をすると、学生たちの提案が東京より東京っぽいと感じることがあります。東京で今問題になっていることを敏感に察知して、うまく盛り込もうとする意識が大きいんです。もっと離れて広島まで行くと、完全に問題設定がオリジナルなんですよ。本当は、名古屋の学生たちも自分たちなりのテーマ設定とか様式があるはずなのに、「名古屋にはないから」って探そうとしていないのかもしれないですね。もったいないなと思う。今回はそれを見つめるいい機会になるといいですよ。

藤村 間宮さんがおっしゃるように、学術都市やデザイン都市のポテンシャルはあるわけですよね。それなら、大学や研究室が実施に関わることを名古屋のアイデンティティにするのはどうなんでしょう？

五十嵐 そもそも名古屋って教育熱心だと言われてますしね。あ、名古屋じゃなくて愛知県全体かな。

間宮 そうですね、昔からそう聞きます。

藤村 教育熱心な名古屋だからこそ、地域が一体となって大学生や学生を育てているイメージや、大学の研究室が開かれた場所であることを共有しやすいんじゃないでしょうか。

間宮 なるほど。僕は、学生の若い力や、デザイン・アート系の大学がこれだけ整っている状態で、そこにどんな切り口があれば中部圏を盛り上げることができるか探りたかったんです。少し答えが見えた気がしますね。

藤村 一方の学生たちは、自分たちが地域に守られているという意識を持ちづらくなっていると思うんです。このプロジェクトで事例ができれば、彼らの意識は変わるような気がしますね。

原田 五十嵐さんが地域特集の時に書かれていた「東京もローカルだ」っていう言葉。僕もすごく共感できるんですよね。そうやって相対化するためにも、各地方が自分たちの方法論なりテーマを見つけてほしいし、結果としてその土地らしい風景がつくられていってほしい。今回の赤池のような土地って日本全国にあるわけだけど、どこでも一律に通用する普遍的な手法をこのプロジェクトの成果にするのではなく、「名古屋スペシャル」でいいと思うんです。この土地を実質的に良くするためのやり方と、それによって生まれる質の高い住宅・環境を創造してもらいたいですね。実施設計を通して、リアリティのあるものとして社会と向き合ってもらいたいな。



4. 提案に向けてのヒント

五十嵐 今回は1つの研究室で3軒まとめて設計するんですよね。3軒だからこそ生まれてくる関係性を、どうデザインするのか…というのもキーポイントになりそうですね。

原田 プロセスも多様ですね。先生が全部デザイン決めて、学生につくらせるのではつまらないし、メインのデザイナーを3人選ぶ感じかな？

間宮 戦略はとても重要ですね。何が実際のクライアントさんに響くのか考えて、3軒同じテーマでデザインをつくるのか、もしくは3つバラバラのデザインを考えて成立させるのか。そういう部分までじっくりとニーズを読んでほしいと思っているんですけど。

藤村 もちろん3軒の関係性も大切ですけど、その前に、しっかりクライアントに向き合えば向き合うほど、固有の問題が出てくると思うんです。だから、まずはそこから始めるといいんじゃないでしょうか。そうして出た答えを抽象化する際に、建築論があるかないかが問われるとは思いますが、とにかく学生たちには萎縮せず、気負わずというバランスで取り組んでほし

いですね。

原田 このコンペ、審査の対象は何になるんでしょう？ クライアントが決まっていない状態で選ぶわけですよね？

藤村 やっぱり考え方なんじゃないでしょうか。「こういうクライアントならこういう提案で、将来はこんな発展可能性がありますよ」という明確な提案が選ばれるような気がしますね。単に成果物として建物を評価するのではなく。

間宮 6月に中間エスキスを入れたのも、そういった考え方の偏りを極力少なくするためなんです。いきなり本番では無理があると思っています。ところで、コンペの舞台となる赤池という場所について、少しお話してもいいですか？ 地下鉄の最終駅なんですけど名古屋に隣接していて、人気のあるエリアなんです。だからこそ日進市が大規模な開発に取り組んでいて、共感を持ってくれるクライアントが見つかるかと予測しています。

藤村 人口が増えていて、若々しい街なんですね。学生のみならずにとっても、こういった郊外の住宅街はどういう印象なんですか？ 私たちの団塊ジュニア世代にはなじみのある風景だから、感情移入しやすいけれど。80年代に民間開発された郊外ニュータウンは、集中的な投資をしたゆえに一気にオールドタ

五十嵐太郎
東北大学大学院教授

原田真宏
MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO

藤村龍至
藤村龍至建築設計事務所

間宮晨一千
間宮晨一千デザインスタジオ

収録日：2013年4月12日
ライター：加藤絢子
会場：MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO
撮影：間宮晨一千デザインスタジオ

ウンになってしまったという歴史があるんですね。その顛末を知った上で、街づくりに取り組んでほしいと思います。つまり、街の将来像を自分たちなりにイメージした住宅であってほしい。例えば、クライアントが子育て世代だとします。今は若いからプライバシーを強調した閉じた住宅でもいいけれど、将来的にその人たちは地域の人と助け合って生きなければなりませんよね。そうやって歳をとった時のイメージを、きちんと想像しながら設計すべきだという気がしますね。単純に若々しい家をつくれば良いわけではなくて。

原田 「今もよくなきゃいけないけど、未来もよくなきゃいけない」という視点ですね。新しい街は必ず将来、歳をとる。その時にどういう社会になっているのか、将来像が折り畳まれた家を考えてみてほしいですね。家族だけでなく、街全体が歳を取っていくことを考えてほしい。

五十嵐 そうですね。時間を意識した「未来の風景をつくる」というタイトルそのものが、このコンペの最大のテーマなんだと思います。

(終)

第一回「未来の風景をつくる」学生実施コンペ

「あたらしい街と、わたしたちの未来」

□提案

対象敷地において、3区画にそれぞれ各1戸、計3戸の戸建住宅を提案してください。また、この住宅をコンペ終了後に実施プロジェクトとして実現（販売、実施設計、竣工等）するために、必要だと思われることも提案してください。（例：ターゲット設定、販売戦略、メンバー組織図、他）

□対象敷地情報

所在地：愛知県日進市赤池町箕ノ手2丁目（別紙資料等参照）
用途地域：第一種低層住居専用地域
建蔽率：30%
容積率：50%
敷地総面積：766.94 m²
区画数：3区画
土地価格：3区画で計6,000万円の想定

□提案における条件

現状の土地利用計画図における、対象3区画内の敷地境界線および宅盤の高さなどは、建物の提案に応じ変更可とする。ただし、その際の開発行為に関わる変更は不可とし、宅造法の範囲内での変更とする。

□応募締切

中間審査締切：2013年6月12日（水）当日消印有効
最終審査締切：2013年8月31日（土）当日消印有効
送付先：〒468-0015 名古屋市天白区原4丁目1107番地
株式会社間宮晨一千デザインスタジオ
「未来の風景をつくる 学生実施コンペ」係 宛
※応募は郵送のみ。持込の提出は不可といたします。

□お問い合わせ先

上記以外のことに関して、不明点・お問い合わせがございましたら、下記アドレスまでご連絡ください。
「未来の風景をつくる 学生実施コンペ係」
株式会社間宮晨一千デザインスタジオ（担当：石田）
MAIL mirai-no-fukei@m-s-ds.com
公式サイト <http://www.mirai-no-fukei.com>